

	鳥取大学 農学分野
学部等の教育研究 組織の名称	農学部（第1年次:235） 大学院農学研究科（M:61） 大学院連合農学研究科（D:17） 乾燥地研究センター
沿革	大正9（1920）年 鳥取高等農業学校創立 昭和24（1949）年 鳥取大学農学部設置 昭和42（1967）年 大学院農学研究科設置 平成元（1989）年 大学院連合農学研究科設置 平成2（1990）年 乾燥地研究センター設置 平成22（2010）年 乾燥地研究センターが共同利用・共同研究拠点に認定
設置目的等	<p>大正9年に、農林業の発展を助長することが山陰地方の将来の発展と隆昌を期する根本方策とされ、鳥取県や地元政財界、兵庫県但馬地方の有志からの強い要請があり、鳥取高等農業学校が創立された。昭和24年には新制大学への移管によって、鳥取大学農学部として設置された。</p> <p>昭和42年に、農業の高度化と多様化に寄与する人材を育成するため、農学に関するより高度な知識、技術を修得させることを目的に農学研究科修士課程が設置された。</p> <p>平成元年に、高度な専門的能力と豊かな学識を備えた研究者・技術者を養成し、学術研究の進歩と生物関連諸産業の発展に寄与するため、鳥取大学、島根大学、山口大学を構成校とした博士課程3年の鳥取大学大学院連合農学研究科が設置された。</p> <p>平成2年に、乾燥地における砂漠化防止及び農業的開発利用に関する総合的研究を行うことを目的として乾燥地研究センターが設置された。</p>
強みや特色、 社会的な役割	<p>鳥取大学は「知と実践の融合」を教育理念とし、知力のみならず、これを実践できる能力として知力、実践力、気力、体力、コミュニケーション力の五つの要素を基とした「人間力」の豊かな人材の養成に力を注いでおり、地域と強く連携して実学を展開するとともに、以下の強みや特色、社会的な役割を有している。</p> <p>○ 学士課程は、農学の専門知識と技術を身につけ地域・国際社会に</p>

貢献できる幅広い視野と創造性を有した人材、並びに実践的行動力及び国際通用性を身につけた獣医師育成の役割を果たす。修士課程は、広い視野に立ち人類の生存に関わる諸問題を解決できる高度専門職業人・研究者を、博士課程では、専門知識・洞察力・問題解決能力を備えた技術者・研究者を養成する役割を果たす。

- 学びの主体性を持たせるため、菌類きのこに関するバイオテクノロジーや乾燥地科学を専門とする特色あるコースを含む六つの教育コースに分けて教育研究を行っており、専門性が高く、かつグローバルに活躍できる人材の育成を目指し、不断の改善・充実を図るとともに、獣医学教育では共同学位課程を設置し、合同授業や国際獣医事に係る必修科目等を通じて、実践力を備えた獣医師を養成する機能を充実する。更に博士課程では、高度な専門的能力と豊かな学識を担う人材育成に加え、これまでに乾燥地科学に特化した専攻を設置しており、今後は、菌類きのこ等の研究の強みを生かして教育研究の充実を図る。
- 地域産業における諸問題を課題に取り入れた研究を展開しており、なかでもナシ、菌類きのこ、砂丘地・乾燥地農学や鳥インフルエンザ等に関する特徴ある研究を強みとしている。これまでに蓄積した多くのナシ及びきのこ遺伝資源を基盤として、ナシ新品種の育成や、きのこ遺伝資源の医薬・食品分野への活用研究を推進し、また、鳥インフルエンザの出現予測や予防に関する提案を行うなど、研究成果を積極的に社会へ還元していく。
- 乾燥地科学分野では、「乾燥地植物資源バンク」を整備・活用し、乾燥地における農業生産の向上、砂漠化土地の修復、黄砂発生プロセスの解明・発生源対策等の研究を推進し、全国共同研究を実施するとともに、国連砂漠化対処条約及び国際協力機構に対して組織的に支援・協力を行い、世界の砂漠化防止、乾燥地における国際協力に貢献する。
- これまで、国際協力機構集団研修による乾燥地の水資源確保、高病原性鳥インフルエンザの流行防止対策の提案等の国際社会への貢献を果たしてきたほか、鳥取県における農政や試験研究への助言、ナシの生産技術指導など地域への貢献を果たしてきた。今後もこのような強みを生かして、鳥取県をはじめ、我が国及び諸外国の農業振興に寄与する。

	<p>○ 昭和48年以降、梨栽培者向けに梨栽培生理講座を毎年開催し、多くの農業生産者を受け入れてきた。これらの実績に基づいて、今後も農業者並びに技術者を対象とした学び直し講座を開講するほか、地方自治体職員等の研究科への受け入れを積極的に行い、地域農業の発展に資する。</p>
--	---